

香散見草（梅花）のこと

総務部 総務課 有岡利幸

香散見草は梅の異名

近畿大学中央図書館館報の誌名の「香散見草（かざみぐさ）」について、すこし書きたい。館報名「香散見草」の採用経緯は、創刊号に詳しい。

香散見草は、梅花または梅の異名である。梅花は春先のまだ寒さの残っている最中に咲く。古来より、梅は寒さのなかで凜とした気品をもって、可憐な花をつけ、いい香りをあたり一面に漂わすので、人々に愛され親しまれてきた。

梅花といえば、白色の花を連想する。白という色に対し日本人は特別に、改まったものを感じ、めでたいしるしとして受け取る。白色の花をひらく梅花は、めでたい花と認められてきた。

しかし、梅花は一花ずつ咲き、梅花が終わってから、さらによほど暖かい季節になって、枝先に房状の花を一度に開く桜花と比べ、華やかさの点で見劣りがする。万葉集では花といえば梅花を指していたが、平安時代中期以降には花という代名詞は桜に変わるなど、やや疏（うとん）じられてきたようにみえるが、愛好するものは現在に至るまで絶えることなく続いている。

桜花には『桜史』（山田孝雄著）という立派な通史が著されているが、梅には未だその通史がない。梅花の通史的なものを調べたいと、中央図書館の閉架を時折さがしているけれど、いい資料となかなか巡りあえない。

あるとき、急ぎの用事があった江戸時代の料理本の復刻本が入った秩の場所を、閲覧担当の方に教えてもらった。料理本の秩

には十数冊が一緒に入っていた。その中に見たいものがあつたので、無事所要の事柄は解決できた。時間的にもすこし余裕があつたので、近くの秩入りの和本を覗いたところ、呆図と表題のある本をみつけた。呆とは梅のことで、梅の花のいくつかの品種を図に描いたものだった。そのときは、次の閲覧を楽しみにして元の場所にもどした。いつかこの本を手にとることができるときは、私の調べものはいくらか進展していることだろう。

梅の種々の呼び方

さて、表題の香散見草（梅）についての話をすすめよう。

梅は植物学的には、バラ科サクラ属の落葉小高木～高木で、中国中南部が原産の樹木である。古来から日本人にその花が愛され、数多くの言葉で表現されている。

梅、樛、某、楨、楠、霖、映、梅、烏梅、宇米、宇梅、汗米、有米、牟梅、于梅、牟女、宇女などの字で表現され、漢詩では清友、清容、天下尤物、世外佳人、好文木、寒梅、百花魁、清香、花魁、花兄、木母などと表現されている。

日本の古語では雅やかにいうときには、ハナ、コノハナ、カザミグサ、ホコノハナ、ニホヒグサ、カハヘグサ、カゼマチグサ、ハツナグサ、ツゲグサ、ミドリノハナ、カトリグサ、イヒナシノハナなどである。木毎の花ともよばれた。木毎とは、梅の字を旁（つくり）と偏（へん）に分解したもの。

中央図書館館報の題名である「香散見草」は、『蔵玉和歌集』に収められた順徳院の御

製からとられている。

山里の軒端にさけるかざみぐさ
色をも香をも誰に見はやさん

和歌の「かざみ」は、香をかぐの意で、「くさ」は植物、ことに樹木のことをさしている。樹木を「くさ」と呼ぶのはおかしいけれど、樹木あるいは草というような形態による総称をまだもっていなかった当時では、樹木も「くさ」の類に含められていた。

古代の日本人は、よく知っている樹木や草はそれぞれ固有名詞をもって呼んでいるが、それらのなかでも特に和歌に詠むときの雅名でよばれる樹木は「くさ」と示されている。例えば、日本人がもっとも目出度い組み合わせとしている松竹梅の筆頭の松は、ヒサキグサ、トキワグサ、チヨミグサ、トキヨグサなどと和歌では詠まれている。また、古代から春先の芽立ちをもてはやされた柳は、カゼクサ、カゼミグサ、カハヅヒグサなどという雅名をもつ。このことから梅が「〇〇くさ」とよばれることも、理解できよう。

余談だが、松も柳も梅と相性がよく、梅と組んで梅松、梅柳という春を表現することばとなる。

梅は香りよ

むかしから日本人は、「ウメは香りよ、サクラは花よ」と、春に咲く代表的な花の特徴をとらえ、それぞれの花のもっとも優れた特質を称えている。さらには、花や芽立ちが春の風物詩となっている樹木たちの最もよい持味を一つのところへ集め、諺（ことわざ）としている。

梅が香を

桜の花に匂わせて

柳の枝に咲かせたい

この諺は、出来得ない願望を並べた代表



咲きそめた白梅から、凜とした気品が漂う。

的なものといえよう。梅も桜も柳も、日本の春を彩る代表的な樹木であり、古典にもしばしば登場する。爛漫と咲く華やかな桜花は、匂わない。そこで馥郁（ふくいく）とした梅花の香りを、桜花に添えれば姿と香りのそろった満点の花となる。

つぎの柳は、シダレヤナギのこと。春先に長く細い枝をしだれさせたシダレヤナギが、ほおっと薄黄緑のあわい芽をふきだしたときは、なんともいえない位に春を感じさせてくれる。柳は奈良朝時代から、その優美な姿がもてはやされてきた。万葉集にも、梅と柳を組み合わせて、春景色を叙した短歌をいくつもみることができる。以上の三つが、日本の春を代表する樹木として古くから愛でられてきた。その三種の樹木のなかで梅は、前述のように「香」が最も特徴あるものとして位置付けられていた。

また、万物が雪の下で息をひそめ、すっかり葉をおとして枝ばかりの落葉樹が、そのままの姿でじっと黙り静まっているときに当たって、梅は一輪、また一輪と花を開

き、いい香りをあたり一面に漂わす。梅が花を開くときは、厳冬ともいえる寒さのなかである。時には氷雪が枝を覆うこともあるなかで、梅は少しずつつぼみをふくらませ、枝先にむかって花を一つずつ丁寧に開いていく。

春以降、花を咲かす万木に先駆けて、清楚な白花を開き、香りのない厳冬の季節にいい匂いをあたり一面に漂わすのが梅花である。それだから梅の花は、別名に花の兄（なお、花の弟とは秋に咲く菊花の別名）、あるいは百花魁と称される。

絵画にもよく描かれ、喜報早春（白梅、茶梅、竹、石、霊芝、小禽を描く）や芝仙祝寿（梅、竹、鶴、霊芝を描く）のように、嘉祥の画題がつけられている。

梅は中国原産の樹木

現代の日本人がもっとも日本的な樹木と認めている梅は、実のところ中国中南部が原産であった。日本に渡来してから、美しい花を沢山つけるようにと日本で改良された樹木である。花木としての梅の改良は、主として江戸時代におこなわれた。

現在では、梅花の色も白、紅、緋、黄、朱、淡紅色があり、花の大きさも直径が約35ミリもある極大輪から、大輪、中輪、径10～12ミリの小輪、極小輪がある。花弁のつき方も一重、八重、半八重がある。したがって、これらが組み合わさって、梅の花の品種は300種を超える。

日本人は樹木の花を改良することに長（たけ）ており、梅以外にも、桜や椿あるいはサツキにそれぞれ何百種もの品種を作出している。

梅が日本の和歌に詠まれた最も古い年代のものに、『古今和歌集』（905年成立）の「かな序」がある。仁徳天皇（在位313～399）がまだ皇太子になる以前で、難波に住んでいたとき、百濟から渡来した学者王仁がつぎの和歌を詠んだ。これが和歌のはじまりであると、『古今和歌集』の

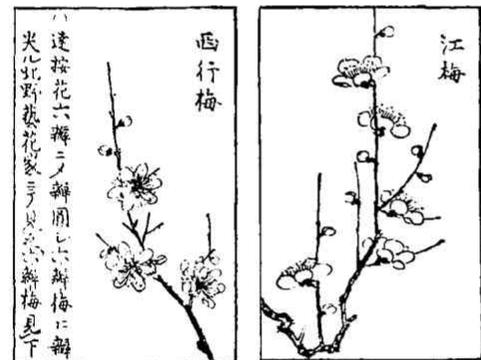
「かな序」は述べている。

難波津に咲くやこの花冬籠り
今は春べと咲くやこの花

この和歌には「この花」が二度も出てくるが、「この花」が何であるかについて、古くから論争された。古今和歌集の編者紀貫之が「この花とは、梅の花を云うべし」と記しているにもかかわらず、桜花を指しているとみる人が結構多い。彼等が根拠としているところは、梅が文献上にもっとも早く現れるのは漢詩集『懐風藻』（751年に成立）に収められた葛野王の「終日鶯梅を翫す」であり、それ以前の文献である『古事記』にも『日本書紀』にも梅の記述はないからである。文献に頼りすぎた結果である。

魏志倭人伝は梅を記す

けれども、それらの文献以外には、探索



江戸時代の梅の品種図
松岡怒庵著『梅品』より抜粋

する方法がなかったのも、やむを得ない面もある。しかし、実のところ中国の歴史書『魏志倭人伝』には、中国側から見た日本に生育している樹木として記述されていたのである。魏志倭人伝とよばれているがこれは通称で、中国の西晋王朝の時代、陳寿（232～297）が編さんした『三国志』

の一つ『魏志』の巻30「東夷伝・倭人」のくだりをいう。日本古代史研究のうえで、重要な史料価値をもつ文献である。

魏志倭人伝には、「其木有」の文字を冒頭に樹木らしい12文字が列記されている。これを拙著『松と日本人』のなかで、「その木にウメ、アンズ、クスノキ……あり」と解説した。この読み方は、それまで定説とされてきたものとは全く異なる。根拠としたのは、諸橋轍次が『大漢和辞典』に採用している魏志倭人伝当時に使われていた『説文解字』のよみ方である。同時に中国の人であれば、誰でもその木が何々であると判断できるほど、よく知られた樹木が記されているに違いないと考えた。

この読み方をしたものは、これまで誰もいなかった。3世紀はじめの、日本の歴史でいえば稲の栽培がやっと普及してきた弥生時代に、梅も杏も桃も渡来していたとは、まったく考えられないことだったからだ。万葉集を研究する学者たちの間では、太宰府師の相伴旅人の館で開かれた歌会の「梅花歌三十二首」などをもとに、梅の渡来は万葉集が編さんされる少し前であろうとの説が有力視されている。

しかし、実態は魏志倭人伝の「その木にウメ、アンズ、クスノキ……あり」の記述が正確だった。中国の人は、自分の国の樹木が日本へも渡り、栽培されていることを確かめたように記述している。そのことは、弥生時代の遺跡から発掘される梅の核や、自然木の木片が裏付けをしてくれている。

弥生時代の遺跡から梅が出土

弥生時代中期に生育していた梅の自然木の木片が、近畿大学東大阪キャンパスにごく近い八尾市亀井町の亀井遺跡から発掘されている。亀井遺跡は、現在は近畿自動車道および大阪府道中央環状線の道路の下にあるが、この道路建設にあたって高架自動車道の橋脚位置をさめるための地質調査のとき、弥生時代の遺跡が発掘された。その

遺跡の弥生時代中期の埋土層から二葉松亜科、ニレ科、コナラ亜科、ヤナギ属、ヤブツバキとともに、梅の自然木の破片、桃の核が出土していた。発見者の山口誠治氏は、報告書のなかで「中国中部原産で、日本に伝来したものと考えられるウメの存在により、栽培あるいは保護されていた可能性が強い」と述べている。

亀井遺跡以外にも、山口県綾木郷台地遺跡（弥生中期）、同県熊毛町岡山遺跡（弥生中期）、同県平尾町の岩田遺跡（弥生前期）、京都府綾部市の青野遺跡（弥生中期）、東京都板橋区前川泥炭層（弥生後期）などの弥生時代の遺跡から、桃や栗、あるいは米、大豆、杏などとともに梅が見つかっている。

つまり梅は、桃、杏とともに、弥生時代前期には日本に渡来し、栽培されていたのである。そのため梅や桃、杏をよく知っている中国の人は倭という野蛮な国にも、中



梅は、屋敷や畑の片すみに植えられ、全国的に栽培されている。

華文明の光が及んでいると判定し、そのことを歴史書のなかに記述したのだ。けれども、樹木に関する記述の最後に「山椒やシヨウガ、ミョウガもあるけれど、これを使いこなして味の良い料理を作ることはできない」と記し、まだまだ未開の国だと評価

している。

弥生時代前期、稲に伴われて中国の長江流域から渡来してきた梅は、稲とともに日本各地に伝播した。梅は大面積の栽培は少ないが、稲が作られるところでは、屋敷や畑のかたすみで栽培された。庭木としても重用された。本数こそ少ないけれども、どこでも見かけることのできる、ごくありふれた栽培樹木となったのである。そのため、春になれば他の木々に先駆けて真っ先に花を咲かせ、いい匂いをあたりに漂わせることは、誰でも知っていた。

日本文化が稲作文化（その底には縄文時代の森林文化を湛えながら）と称せられるならば、稲作風景も梅花咲く風景も、日本的な風景といっても間違いない。現代の人々が、梅をもっとも日本的な樹木と感ずるのも、故あることといえよう。

古代の人々は梅をよく知っていた

このようにして、梅花というものを、稲作に直接たずさわる人々も、宮廷関係者のような上層の人たちも、よく知っていたので、和歌や長歌の題材とされた。奈良時代になり、国民的歌集の万葉集が編さんされる時、採用された梅の歌は萩に次いで多い127首を占めることとなった。

万葉集には、大宰府長官の館で催された梅花の歌会の和歌が、32首収められている。詠っている人々は、奈良の都から赴任してきた長官や官僚、九州各地の国司クラスの人たちである。広範囲の人たちが、立派な和歌を詠みあげることができたのも、梅に対する十分な知識と観察があったからだといえよう。

万葉集では、梅の香りを詠った和歌はごく少ない。平安時代になって、遣唐使が廃止され、日本文化の国風化が醸成されていったのだが、その集成である古今和歌集には梅の香りがさかんに詠まれている。また女性たちが和歌や物語、日記文学で大活躍しはじめた。それとともに、梅花の香りが大

いにもてはやされるようになった。

当時の貴族たちは、10日に1回ぐらいしか風呂に入らなかったので、身体がひどく臭った。そのために香（こう）を燃やして、その匂いを身体や衣服に染みこませる習慣があった。源氏物語には、数種の香木の粉を練り合わせてつくる薫物（たきもの）とよばれる香をつくる場面がある。日本における香の、もっとも早い文献である

源氏物語によれば、香のもっとも基本となる香りが、梅花の香りである。春の時期に主として用いられた。薫物にも、梅花と名づけられた香がある。薫物の梅花は、数種の香木などで練り上げられているが、それを基本に香木の量をふやしたり、あるいは別の香木を付け加えることによって、異なる香りを調合した。香りが違えば、薫物の名称も変わった。香を焚くときには、その香がどんな香であるか、どんな名称の香であるか、また、その香にまつわる謂われを知って和歌で表現できるかといったことが、貴族たちの教養の一つとされていた。

それというのも、当時の貴族の結婚の形式が、招婿婚（しょうせいこん）あるいは妻問い婚といわれるもので、女性は親の家にいて男性が妻の許へ訪ねていく形式だった。一夫多妻がふつうだったので、妻はひとりだけではなかった。また、男性は気紛れが多い。結婚したといっても妻は夫を待つばかりの身の上だった。夕暮れになると、今日は訪ねてきてくれるだろうか、待ち望んでいた。

好まれた風に散る梅が香

後拾遺和歌集（1086年成立）巻1春上には、梅花が咲いている家に男がきたところを描いた屏風絵を詠んだ和歌がある。

むめがかをたよりのかぜにふきつらん
はるめずらしく君がきませる

平兼盛

梅花の香りを、人を誘いよせる風が吹き

よせ、運んできたのだろうか。春になってめずらしく、あなたが来られた、という意味である。

梅は軒端梅ともよばれるように、屋敷の住居に近いあたりか、あるいは庭先きに植えられ、花の美しさと香りが愛でられてきた。人々がよく目にする場所であり、日常生活のなかでは梅の近くで行動することばしばあるため、梅樹の変化はよく観察されている。春先の開花とともに、冬枯れの風景のなかに、いい香りをおしげもなくただよわす梅花は、人々をより一層梅に親しみをもたせた。今日は来ていただけるか、明日はどうだろうかと、やるせなく男の来訪を女性は期待していた。けれども男は、長らく訪れることはなかった。春になって人のもとに通う風が吹いたのか、梅の香りとともに貴方がめずらしくおい出になった、というのである。

ここでは梅花の香りと、人の匂いが一体的なものと感じられている。そのことを示す和歌として、前記の歌集につきのようなものがある。

むめの花にほふあたりのゆふぐれは
あやなく人にあやまたれつつ
大中臣熊宣朝臣

開花した梅の花の香りが、あたり一面に漂っている夕暮れは、むやみに、梅の香りがその人の袖の香りかと思われ、待人がきたのかと間違っ、ついそわそわとしてしまう、という意である。和歌を詠んだ人は男だが、和歌そのものは女性の立場にたって詠まれている。

前に述べたように、妻の許に通う男性はいい香りで身体を粧った。女性は、男の美醜よりも、男のもつ匂いが自分の好みに合うかどうかで、好悪の判断をする。源氏物語の著者・紫式部は女性であるが故に、男のもつ匂いを描写し、日本ではじめての香(こう)および香の作り方についての文献を

のこしたのである。

これら和歌は人の身体や衣服についた匂いと、梅花の香りの関連性を詠ったものであるが、梅の香りを香りとして楽しんだ和歌もたくさんある。ここまで引用した和歌を収めた歌集には、つぎの歌がある。

むめがかをよはのあらしのふきためて
まきのいたどのあくるまちける
大江嘉言

春風夜芳といふ心をよめる
むめのはなかばかりにほふはるのよの
やみのかぜこそうれしかりけれ
藤原顕綱朝臣

前の歌は、梅の香りを夜中にあった強い風が吹きためたのか、朝方戸をあけると、いい匂いがさっと吹き込んだ、という意である。後の歌は、梅花のみえない春のやみ夜であるが、いい香りを運んでくれる風はうれしいものだ、との意である。

梅花の香りは、樹下だけでなく風に散ってあたり一面がいい香りにみちあふれる。梅樹を香散見草とよんだのは、このように風で散らされても馥郁とした香りを嗅ぐことのできる樹木であるとの認識があったのではなからうか。



梅樹の下で、梅が香を楽しむ人々